



---

# グリーンボンドの インパクトレポーティングについて

---

2025年12月8日

環境省 大臣官房 環境経済課 環境金融推進室

# グリーンボンドのインパクトレポーティングについて

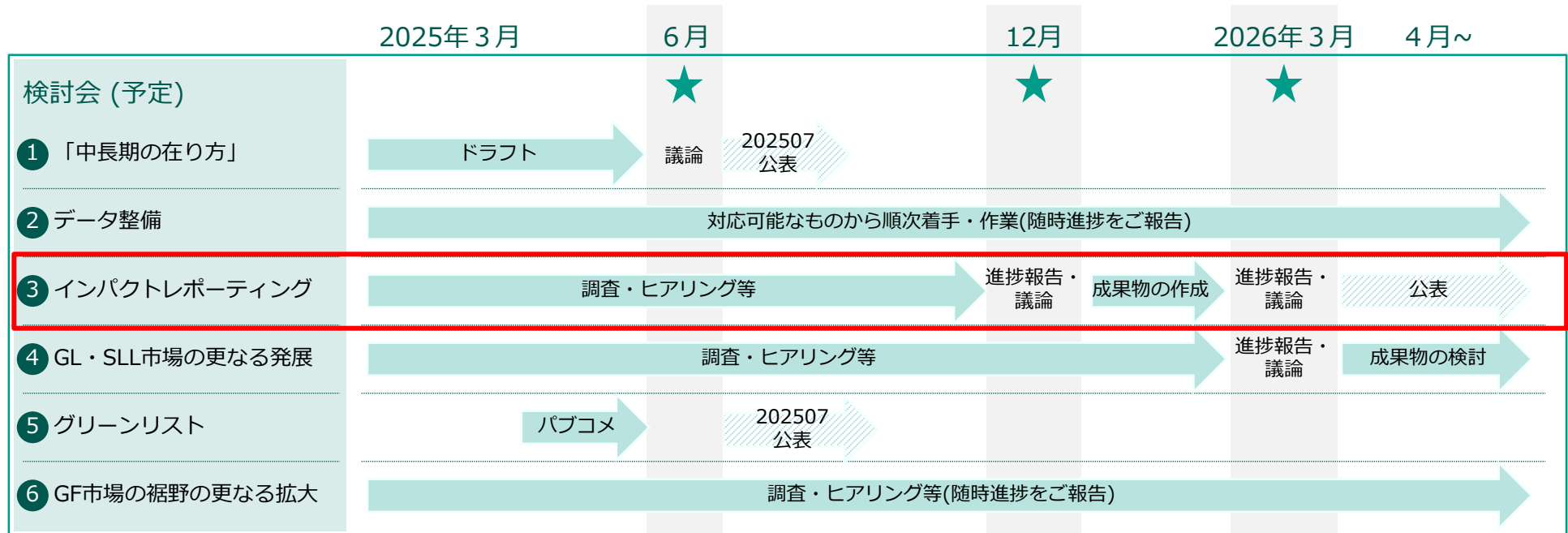
- 2025年3月の第13回検討会において、グリーンボンドのインパクトレポーティングの質の向上に向けた取組として、インパクトレポーティングに関する事例集の作成が有効とのご意見をいただき、以下の作業方針をお示ししていたところ（次ページ参照）。
  - 投資家のインパクトレポーティングに対する目線や、参考になるレポーティングの例等をまとめた事例集の作成・公表を目指し、引き続き調査・分析等に取り組んでいく
  - （年間イメージとして）夏～秋に必要な調査・ヒアリング等を行い、12月頃に進捗報告・議論
- 今般、事務局において、発行体、投資家、資金調達支援者等へのヒアリングを踏まえて「グリーンボンドインパクトレポーティング事例集」の案（参考資料1）を作成したので、事務局案をベースにご議論いただきたい。
- なお、公表に向けたスケジュールは以下を想定。
  - 2025年12月8日 [本日] 第15回検討会において事務局案をベースにご議論
  - 2026年1～2月 事務局から掲載事例の作成者（発行体）へ事例掲載許諾取付
  - 2026年3月24日 第16回検討会において、第15回でいただくご意見を反映した案をベースにご議論
  - 2026年3月末～4月 事例集の公表
  - 2026年4月～ 市場参加者への説明

# 今後の取組方針の全体像（イメージ）

- 第12回検討会においていただいたご意見を踏まえ、環境省としては、以下の項目に取り組んでいきたいと考えており、今回の第15回検討会においては、下記①～⑥のうち、③をテーマとして扱いたい。

- |  |   |
|--|---|
| ① 「グリーンファイナンス市場の中長期的な発展に向けて」の策定          | ④ グリーンローン及びサステナビリティ・リンク・ローン市場の更なる発展に向けた取組 |
| ② グリーンファイナンス関連データの整備                     | ⑤ グリーンリストの更なる拡充                           |
| ③ <u>グリーンボンドのインパクトレポーティングの質の向上に向けた取組</u> | ⑥ グリーンファイナンス市場の裾野の更なる拡大に向けての検討            |

- スケジュールのイメージは以下の通り。



## (参考) グリーンボンドのインパクトレポーティングの 質の向上に関するこれまでの議論

### ■ 第12回 (2024年12月)

- インパクトレポーティングの負担が過度に大きいと、ラベル債ではなく通常社債での調達に切り替えてしまうケースがある。
- インパクトレポーティングについて、情報開示の質・量の拡大は重要だが発行体の負担が大きいため、その行為が意味を持つためにも投資家が形式的な評価ではなく、実質的な対話を行い、事業者の努力を適切に評価する能力を持つべきである。
- 環境改善効果が可視化されることによって、それが経済的・金融的価値の相場観の醸成につながる可能性が出てくるのではないか。

### ■ 第13回 (2025年3月)

- 発行体においては、投資家にも多様なスタンスやアプローチがあることを理解する機会が少なく、架空の投資家に対応しようとしていることが負担感につながっている。
- 発行体がインパクトレポーティングを求められる中で、データの入手先や必要なデータの質や量、処理や数値化の方法が明確化されていないことが、実際の負担以上に負担感を増幅させている要因ではないか。
- 発行体・投資家の双方に何をどうすればいいのかわからない点が多い中では、ガイドラインやベストプラクティス集等の参考になるようなものがあると良いのではないか。
- 投資家層の関心を引くためには環境改善効果と経済的利益が結びつくことが必要であり、インパクトレポーティングの目的が投資判断に資する情報提供であることを明確に打ち出すべき。
- 環境対応等の取組が企業の事業継続性の向上等に寄与する等のストーリーも重要。
- 脱炭素の取組が企業価値にどのように影響するかを整理し、その中でサステナブルファイナンスを活用することが重要。インパクトレポーティングについても、単なる環境改善効果にとどまらず、たとえば脱炭素投資に伴う競争力の向上やコスト削減等、発行体のマテリアリティや事業戦略、企業価値向上との関係を示すとともに投資家が理解・評価することが重要。
- 事例集の作成においては、単なるケーススタディではなく、企業や金融機関がマテリアリティや成長性等の判断に実際に活用できるような具体性を持たせることが重要。
- 企業全体の情報開示の中でインパクトレポーティングをどのように位置づけるかが重要。一律に負担を求めるのではなく、たとえばある企業はインパクトレポーティングを通じて積極的に訴求する、ある企業はあくまで情報開示の一部として簡単に触れる等、発行体毎に柔軟に選択できるようにすることが有効。

# グリーンボンドインパクトレポーティング事例集（案）目的・構成案

- グリーンボンドの発行体におけるインパクトレポーティングの実務を支援し、グリーンファイナンスの質の向上に資することを目的に、事務局において「グリーンボンドインパクトレポーティング事例集」をドラフトした（参考資料1）。
- 作成に当たり、令和5年度発行の銘柄を中心に、課題への対応と投資家が求める情報提供が一定程度できていると考えられる事例を収集・整理した。
- 起案に当たっては、発行体、投資家、アレンジャー、外部レビュー機関へのヒアリングを実施した。



## 構成

- **はじめに:** ICMAグリーンボンド原則や国内ガイドラインの要求事項や指摘されている課題を整理
- **投資家の目線:** 投資家のグリーンボンドのインパクトレポート活用パターン及び必要とする情報を整理
  - ・ ①自社レポートの材料として
  - ・ ②エンゲージメントの材料として
  - ・ ③投融資判断の材料として
- **事例:** 課題への対応と投資家が求める情報提供が一定程度できていると考えられる事例を、各資金用途分類ごとに数事例紹介

# (参考) 投資家、発行体、アレンジャー、外部レビュー機関等より いただいた主なご意見

- 事務局にて投資家や発行体等へグリーンボンドのインパクトレポートについてのヒアリングを実施し、実務上の課題を聴取した。
- ヒアリングの中で、グリーンボンドインパクトレポート事例集（案）についても意見を聴取し、ドラフトに反映した。

## ① グリーンボンドのインパクトレポートに関する課題

### ■ 投資家

- 開示場所が統一されておらずレポートにたどり着きにくい
- アセットマネージャーとしてはアセットオーナーの意向が重要となる
- アウトプットかアウトカムか、いつの将来のインパクトか等、開示のレベル感に差があり集計に課題
- インパクト集計のためには、指標が表形式で簡潔に整理されていると助かる
- ボンドはダウンサイドリスクが重要だが、ネガティブインパクトやリスクについて言及するレポートは少ない
- 現状は自社ポートフォリオにおけるインパクト開示のためにインパクトレポートを参照することが多い。投融資判断にも将来的に活用していきたいと考えているが、現状できていない

### ■ 発行体

- 投資家の目線がわからないので、開示のための開示になっている
- すべての投資家のニーズに応えるのは難しい
- 知識も経験もないため、証券会社等からの提案に沿って実施するのが精一杯
- レポート作成時には発行時の担当者が異動でいないことが多く、モチベーションを維持することが難しい
- 営業秘密等の関係から開示可能な指標が限られ、ありきたりなレポートになりがち

## ② 事例集へのご意見

### ■ 投資家の目線

- 投資家における活用の3パターンは納得感がある / 大前提であり違和感はない（投資家、証券会社）
- 事例も含め、投資家の活用パターン別に整理してみても良いのではないかと（投資家）

### ■ 事例選定について

- 再エネだけでなく多様な資金使途をカバーできると良いが、すべての資金使途・業種を埋める必要もない（投資家）
- 同業他社のレポートを参考にすることが多く、業種別に整理されていると使いやすい（発行体）
- トップランナー/ベストプラクティス中心だと発行体にとっては負担感のある事例集になるのではないかと（発行体、証券会社）
- 海外の事例があると参考になるのではないかと（投資家、証券会社）
- インパクトレポート自体だけではなく、投資家ミーティングや各種媒体を用いたコミュニケーション手法についても発行体のインテションを理解しやすいものが出てきており、参考事例となる（アセットマネージャー）

## ご議論いただきたいこと

- **事例集で発行体に伝えるべきインパクトレポーティングの目的、意義及びメリットについて**
  - インパクトレポーティングの目的を、環境改善効果の可視化にとどまらず、投資家との対話や企業価値の向上につなげる行為として整理することが適切か。
  - 質の高いレポーティングが、発行体にとっての信頼性向上・資本コスト低減・投資家層拡大等にどう寄与するかを、どのように打ち出すべきか。
- **投資家の視点として掲げている活用パターン及び必要な情報について**
  - 投資家におけるインパクトレポート活用方法（①自社インパクトレポートの材料として、②エンゲージメントの材料として、③投融資判断の材料として）は、整理として適切か。
  - 発行体が投資家の期待に応えるために必要な情報や視点、留意すべき点等はほかにあるか。
- **事例の収集、整理、及び提示の仕方について**
  - 事例の選定プロセスや提示方法に、盛り込むべき視点はありますか。
- **本事例集の活用方法、打ち出し方について**
  - 投資家や外部レビュー機関における活用等を含め、より多くの発行体に活用いただくために、環境省としてどのような打ち出し方をすべきか。